

《古代ローマの奴隷教育：再考》<sup>(1)</sup>

小 林 雅 夫

## はじめに

奴隷制社会であった古代ローマ社会では、出自が問われる仕事を別にすれば、生産労働ばかりでなく、さまざまな仕事に多くの奴隷あるいは元奴隷の被解放自由人たちが従事していた。そして、家内労働あるいは手仕事に従事していた人々も、かなりの割合を占めていたであろう。そういった仕事の中にはかなりの技術なり経験を必要としたものも多かった。それに多くの被解放自由人たちは自分の奴隷時代の仕事を継続し、その後の職業としていた<sup>(2)</sup>ことから、多くの人々は奴隷時代に職業訓練を受けたことになる。

とすれば、かれらはどのようにしてそれらの技術や知識を習得したのか、奴隷たちの職業教育が問題となるだろう。仮に奴隷がその技術を習得することは自分にとっても有利であると考え、本人にその技術を習得する意欲があったにしても、それを学習するのは誰れかを決定したのは奴隷本人ではなく、奴隷所有者である主人であったはずである。

奴隷の職業教育を論じる場合に、最も重要なのは奴隷たちに職業教育を受けさせた主人側の動機であろう。つまりわれわれが軽視できないのは、奴隷に職業教育を受けさせ、技術的に熟練した奴隷を養成した方が、主人にとっても有益・有利であるという判断が働いたのではないかということであろう。

もう一つの問題は、今述べた手仕事に従事していた人々とはまったく異なる人々の問題である。しばしば論じられてきたように、ヒューマニズムは古典ギリシアとは時間的にも空間的にも離れた古代ローマ世界に成立したが、ローマにおけるヒューマニズムの担い手たちの多くは、ギリシア人教師たちやギリシア人医師たちであった。自由人の学ぶべき学芸である自由学芸を学んだのは、当然自由人であるローマ市民たちであったが、それらの学芸の教育に従事した教師たちの多くは、出自の卑しい人々、つまり奴隷および元奴隷の被解放自由人たちであった。そして、ローマ社会にとっても不可欠な教育と医療に従事した教師と医師とは、「精神労働」に従事する人々と考えられていたが、報酬として金銭を要求する労働を蔑視したローマ市民が好む職業ではなく、この仕事に従事した人々の多くは、出自の卑しい人々であった<sup>(3)</sup>。

例えば、スエトニウスが『文法家列伝』で名前を挙げて語っている教師たちは、当時はいずれも著名な人物たちだったと思われるが、彼らのうちのかかなりの数の人々が捨て子であったとスエ

トニウスが明言していることは広く知られている<sup>(4)</sup>。彼らが捨て子であったことは最下層出身者であったことになるが、どうして奴隷が著名な教師になるほどの学識を身につけることができたのかという疑問が残るであろう。

それが手仕事あるいは肉体労働であれ、精神労働であれ、奴隷あるいはそれに近い下層の人々がその仕事を職業とするだけの技術なり知識をどうして身につけることができたのかが問題であろう。この際、本人の意欲なり適性なりは大いに問題ではあろうが、教育を受ける側の動機はそれ程重要ではないようにさえ思える。もし仮に奴隷のための学校ほどのものではないが、それに類似した教育の場が存在したにしても、奴隷には授業料を支払える能力はないはずだし、さらに仮にそういう例があったとしても、授業料を支払ったのはその奴隷の主人であったはずである。さらにそれが授業料という形でなくても、奴隷の教育のためには何らかの出費なり負担を奴隷所有者は強いられただけである。

それでは、何のために主人は自分の奴隷の教育費を負担したのか。そしてこの場合は名誉のためではなく、経済的利益があつてのことだとすれば、どういう経済的利益が目的だったのか。教育を授けた側の動機が問題となるだろう。本稿では、家内労働や生産労働に従事した奴隷ではなく、いわゆる精神労働に従事した教師と医師の場合を中心に検討したい。

奴隷たちの職業教育も無目的におこなわれたはずはないとすれば、奴隷に職業教育を授ける動機、つまりどういう経済的利益が期待されたのかが問われなければならないだろう。この問題に関しては、全く新しい史料が提供されることもめずらしいが、必要な範囲内でまず教師と医師の実態をみた後に、ローマにおける奴隷の職業教育に関してこれまでに議論されてきた問題点を整理し、とりわけ教育を受けさせた側の動機に注目しながら、奴隷の職業教育がローマ社会でもっていた意義を考えてみたい。

## 第1章 教 師

### (1) 教育史のなかの教師研究

古代世界では数多くの哲学者や著述家が教育論を述べてきた。例えばプラトン、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌス、リバニオスさらにアレクサンドリアのクレメンスといった人々が、盛んに論議している。それ故、近代においても、古代の教育論そのものとかギリシア語・ラテン語修辞学（弁論術）に関する研究は数多い。しかしそれに反して、教師に関する言及は古代作家の著作にしばしば登場するものの、教師の実態についての情報は少ない。われわれは文学者や哲学者の教育論での発言が必ずしも当時の現実を正確に反映しているとも考えにくいだろう。

ローマ教育に限ってみると、確かにスエトニウスの『文法家列伝』の記述は、数少ない貴重な情報を与えてくれる。しかし、教師の当時の社会的地位を反映しているためもあるか、この種の研究にとって重要な情報を与えてくれる墓碑銘などに記録されることが少ないことや、さらに

ローマ教育に関する法整備の欠如、法典史料の貧困さも教師の実態に関する研究を困難にしている。

古代教育史の研究では、H.-I. Marrou のこの研究分野での先駆的業績<sup>(5)</sup>があり、その後も Clarke<sup>(6)</sup>、Bonner<sup>(7)</sup>、Kaster<sup>(8)</sup> の諸研究が続いたが、教育制度や教育の実態についての研究不足は否定できないだろう。そのような状況の中で、Christes の『古代ローマの文法家と文献学者としての奴隷と被解放自由人』<sup>(9)</sup>が登場し、そして1994年には、Sandrine Agusta-Boularot がローマ帝国下（前1世紀～後4世紀）の文法家に関する碑文学的研究<sup>(10)</sup>を発表し、医師の研究に対して遅れがちだった教師の碑文学的研究に大きく寄与した。さらに近年ローマ教育に関する一連の著作<sup>(11)</sup>を発表した Rosella Frasca は、その一つの著作で、土地測量技師、建築家、地理学者、医師、助産婦、獣医、初等学校教師・文法学校教師・修辞学者などの職業教育を教育史の観点から論じている<sup>(12)</sup>。

## (2) スエトニウスが語る奴隷教師

奴隷教師と言ってもさまざまなタイプがあったと思われるが、例えばラテン文学の創始者とみられているリウィウス・アンドロニクスは、南イタリアのギリシア植民都市の出身で、タレントゥムからローマに奴隷として連れてこられた。彼はその後解放されて、旧主人の子供たちにギリシア語とラテン語を教える教師となった。スエトニウスが *semigraeci* と呼んでいる南イタリアのギリシア諸都市出身の初期のギリシア人教師たちの場合は、リウィウス・アンドロニクスの経歴が代表しているように、ギリシア都市で生まれ、完全にギリシア風教育を受けて成長している。それ故、彼らの中に奴隷教師がいたにしても、彼らは奴隷になる以前にすでにギリシア風教育を受けていたわけで、彼らは「奴隷として教育を受けた人々」ではないから、奴隷教育の対象にはならないだろう<sup>(13)</sup>。

ところで、スエトニウスは、『文法家列伝』の中で言及している著名な教師たちの多くは捨て子だったと述べている。捨て子だった人物が、教師になるまでの過程は非常に興味深いが、おそらく職業選択の自由は、非常に限られていたであろう。スエトニウスによれば、

Marcus Antonius Gniphos は、子供の時に捨てられ、彼を拾って育てた人によって教育された。Gaius Melissus も捨て子だった。ブルトゥスやカッシウスの先生の Staberius Eros は奴隷だったので、自分が奴隷市場に売りに出された時、自分の貯金でわが身を買わなければならなかった。Scribonius Anphrodisius は、Orbilius の奴隷であり、生徒だった。

ほとんどの文法家も被解放自由人だった。Saeuius Nicanor, Lucius Ateius Philologus, スラの被解放自由人だった Cornelius Epicadus, ポンペイウスの被解放自由人だった Lenaecus, アッティクスの被解放自由人だった Quintus Caecilius Epirota, アウグストゥスの被解放自由人だった Gaius Julius Hyginus 等がいた。

ごく一部の人を例外として、彼らは一般的に貧しかった。授業料収入だけでは生活できず、その不足を補うためにも他の仕事を引き受けなければならなかった。Matcus Pompilius Andronicus は、余りにも貧しかったので、自著を売らねばならなかった。Pulbius Valerius Cato は、長生きしたが、生涯極度の貧困のうちに過ごした。アウグストウスの被解放自由人だった Gaius Julius Hyginus は、貧困のなかで世を去っている。

彼らが教師になるまでの経過をみると、Orbilius は孤児であったが、その後政務官の従者となり、つぎにマケドニアに従軍したり、騎兵士官となった後にこの職業についている。Lucius Crassicius は、芝居作者の助手として舞台関係の仕事をしていた。Marcus Pomponius Marcellus は、以前は拳闘家だった。Quintus Remmius Palaemon も奴隷だった。最初は織工の仕事をおぼえたが、その後パエダゴグスとして自分の主人の息子と一緒に学校へ通っているうちに教育を受けてしまった。Marcus Valerius Probus は、長いこと百人隊長に任命されるのを待っていたが、とうとう待ちくたびれて研究に専念した。このことから分かることは、ボクサーが教師になっても少しもおかしくないが、教師になるためにボクサーになる必要があるという理屈はないだろう。要するに、スエトニウスの記述から判断するかぎり、多くの人々はその時その時に可能な仕事に就いたらしく、結果として教師になっていたにすぎないだろう。つまり、奴隷出身の彼らに許された職業選択の自由はきわめて限られていたのであろう。

### (3) プルタルコスが語る初等学校教師

ローマ最初の学校に言及したものとしてしばしば引用されるのが、プルタルコスの証言である。かれはつぎのように述べている。「ローマ人が報酬をとって教えるようになったのは、かなり後のことであり、初等学校を開いた最初の人物は、スプリウス・カルウィリウスであった」<sup>(14)</sup>。ここで名前を挙げられている人物とは、前235年のコンスルだったカルウィリウスの被解放自由人であったから、前3世紀中頃におそらく一定の授業料を徴収する初等学校が開校されたことを指摘したものと解釈されている。そして、もしこのカルウィリウスが金銭を徴収した最初の教師となると、これ以前の学校は一定の授業料を決めていなかったことになるだろう。

プルタルコスの発言をこのように解釈してくると、授業料として金銭を受け取るという古代人にとってきわめて卑しい行為をする学校教師とは、カルウィリウスと同様に、ほとんど奴隷あるいは被解放自由人であったろう。それならば、こういった教師たちは、まがりなりにも教師を職業にするだけの教育をどういうふうにしたのであろうか？

### (4) パエダゴグス

ローマのパエダゴグスは、ギリシアのパエダゴグスと同様に、両者がともに若いころには、主人の息子の遊びと勉学の相手を努めながら自分も学習して、主人の息子の従者として通学にも同

行し、教室の後に立ったまま同じような授業を受けることも可能であった。やがて彼は、成長とともに教養を身に付けた奴隷となる。そして、今度は彼がともに勉強した人物の子供が勉強する年令になると、両親が多忙とか留守の時には、子供たちの世話が彼に任された。彼は家庭内や通学途中の危険から子供たちを守るとともに、子供たちの勉強を指導した。つまり、パエダゴグスは授業料を払うことなく、主人の息子の成長とともに自分も自然と教育を受けていくわけである。そして、もし彼が優秀な人物だったら、他の誰よりも教育の成果をあげた人物となりえたであろう。

こうしてみると、奴隷のための学校などが確認できず、また奴隷は授業料を負担できないとすれば、パエダゴグス出身の奴隷が最も教育を受けやすかったろうし、また、本人の学習能力もパエダゴグスの時代にはっきりわかったであろう。そして、おそらくパエダゴグス経験者は成長後に教師になりやすかったろうと想像できる<sup>(15)</sup>。それ故、一般的にみれば、カルウィリウス以前の学校教師たちは、おそらくこのようなパエダゴグス出身の奴隷たちの中からでた可能性が高いのであろう。こうして主人の家で奴隷の教師から教育を受けたか、何らかの刺激を受けて独学したか、あるいは読み書きのできる奴隷として市場で購入された多くの教育のある奴隷たちが、後にそのまま解放されたか、あるいは一部は学問のある主人の助手のような仕事をしながらさらに勉強して、学校教師となったと推測できるだろう。

ところで、どんなに優秀なパエダゴグスがいたにしても、パエダゴグスと学校教師とは区別されるべきである。ただ一般的に、パエダゴグスの中には自由を獲得して被解放自由人となった後、以前の経験と知識を生かして独立し、学校教師となるものが多かったのであろうと想像されるにすぎない。

## 第2章 医 師

### (1) 奴隷医師

キケロは『義務論』の中で、高度な知識を必要とするか、あるいは少なからず社会に有益な職業である医師や建築家や自由学芸の教師は、それらがふさわしい人々には適しており、小売商売や職工のような卑しい仕事よりは好ましいが、農業ほど自由人にふさわしい仕事はない、と述べており、医師は俗悪ではないまでも、自由人に真にふさわしい職業ではないことを主張している<sup>(16)</sup>。

ローマの思想家たちも法律も、ローマ市民が医師になることを否定したり、禁じているようには考えられないが、実際にはローマ市民はすすんで医師になろうとはせず、医師の職業に従事したのは、奴隷 (servi)、被解放自由人 (liberti)、外人 (peregrini) といった非市民たちであって、生来自由人 (ingenui) はごく稀であった<sup>(17)</sup>。プリニウスも「ギリシアの学芸である医学に、ローマ人は従事しなかった」<sup>(18)</sup>と述べている。この点では、ギリシア世界とローマ世界とは決定的に異なっていた。

ローマ世界の医師を社会階層別に計量化することは不可能であるが、碑文史料から見ても、生来自由人が医師になることは稀であった。例えば、ラテン碑文集 (CIL) の VI 9562-9617 には、50人の医師が登場するが、Duff は、彼らのうち2人だけが peregrini であることが確実で、12人は解放奴隷であり、13人は1つしか名前をもっていないので奴隷か被解放自由人であり、残りの人々のうち半数はおそらく被解放自由人の子孫であろうと分析し、このことからローマの医師たちのうち約25パーセントの人々は、屈州出身者か、彼らの子孫であったと推測している<sup>(19)</sup>。しかし、これはあえて分類してみた1例であって、このことをどこまで一般化できるかどうか慎重でなければならないだろう。

ローマ世界の医師の多くはギリシア系の医師で、一部がエジプト人医師であったが、ちょうどギリシア人のパエダゴグスやギリシア人家庭教師たちが増加していったように、ローマ人の家庭に抱えられたギリシア人奴隷医師たちが、解放された後、被解放自由人医師として開業した可能性はある。しかし、そのような医師の人数はわからないものの、リウィウス・アンドロニクスの場合と同様に、彼らは奴隷になる以前にすでにギリシアの医学教育を受けていたことになる。それ故、奴隷教育の対象とはならないだろう。

被解放自由人の医師も多かったと思われるが、彼が奴隷時代に医学教育を受けたのか、解放されてから医学教育を受けたのかははっきりしにくい。しかし、奴隷医師は何かの特別な事情で自由人の医師が奴隷になってしまったということでもないかぎり、奴隷か、あるいは法的には解放されていても最下層民として医学教育を受けたに違いない。

文学作品にも登場する奴隷医師をみると、アウグストゥスは、有名な医師のアントニウス・ムーサを侍医にしていたにもかかわらず、孫娘のアグリッピナに宛てた書簡の中で、奴隷医師 (servi medici) に言及しているが<sup>(20)</sup>、このことから彼がムーサとは別に、奴隷医師たちを所有していたことが分かるだろう。また皇帝に限らず、当時の有力政治家が自分の側近の中に侍医を抱えていたことはよく知られていることであるが、彼らの中には当然奴隷医師も含まれていたはずである<sup>(21)</sup>。さらに一般的に富裕なローマ人の家庭には、しばしば奴隷医師が抱えられていたことは明らかであり<sup>(22)</sup>、しばしば主人や主人の家族の主治医として働いていた。そして主人が遠方に出掛けるときには、彼も主人に同行している。例えば、カエサルが雄弁家アポロニウス・モーローのもとで雄弁術を学ぶためにロドス島に向かう途中で海賊に捕らえられて40日近くも監禁された際に、カエサルに付き添って一緒に監禁されたのは、1人の医師と2人の従者だけであったと伝えられている<sup>(23)</sup>。こういった医師がすべて奴隷であったとは決めかねるにしても、多くの奴隷医師たちがこのように主人の伴をして旅に出ていたものと思われる。

## (2) 女医・助産婦

人数を推測することは余りにも困難であるが、古代ローマ世界には medica と呼ばれる一定数

の女医がいたことはあきらかである<sup>(24)</sup>が、人数の点では男性医師より少なかった。女医は、特定の階層の出身者に限定されておらず、さまざまな階層の人々であったが、男性医師の場合と同じく、多くは出自の卑しい人々であったろう。もちろん生来自由人 (ingenui) の女医もいて、中には注目を集めた女医もいたが、碑文史料にみる限り、多くの女医たちはギリシア人か、ギリシア名を名乗っており、被解放自由人の女医や奴隷の女医もいたことは明らかである。この点では、男性医師と女性医師とに共通した面があったらしい。女医たちは富裕な家庭に仕えているか、独立した開業医であったが、奴隷医師は富裕な家に所有されていたと推測される。

こうみてくると、医学教育の面で恵まれた環境で育った一部の女医はともかく、例えば、奴隷の女医はどこで、誰から、どのように医学教育を受けたのであろうか？

女医 (medica) と助産婦 (obstetrix) の仕事の区別は明確ではなく、女医と助産婦のギリシア語の合成語からきている iatromea という語にもあらわれている<sup>(25)</sup>。女医の診察が期待できない場合には、しばしば助産婦が女医の代役をつとめたようであり、むしろ一般的には人数の点からみても、助産婦が招かれたのであろう。

助産婦になった女性は、どういう人々か？ 助産婦の仕事、助産婦になった動機を推測すると、低い階層の出身者が多かったと推測され、被解放自由人あるいは奴隷の女性たちが多かったようであり、助産婦の墓は、概して質素である。ローマ社会では、前述の如く、被解放自由人の多くは奴隷の時に従事していた仕事を解放後も継続していたと思われる。とすると、被解放自由人の助産婦たちも、奴隷の助産婦として養成された人が多かったことになるだろう。

助産婦たちの職業教育、医学教育に関しては、助産婦志望者に対してソラノスが最初に求めている条件は、助産婦自身が出産体験者であったことではなく、読み書きの能力であった<sup>(26)</sup>。読み書きの能力とは、明らかに医学書から学ぶために必要だからである。例えば、ソラノスの『産婦人科学』の読者と想定される人には、助産婦および助産婦志望者も含まれていた。そして、Theodorus Priscianus の場合のように、ガレノスは著作『子宮の解剖』を一人の助産婦に捧げている<sup>(27)</sup>。これらのことは、彼女たちにこれらの医学専門書を読むことが期待されていたことを意味しているであろう。

ただこれだけのことから、我々はすべての助産婦が専門医学書を読み、高度な医学知識を身に付けていたと考えるには慎重でなければならないが、たとえ一部の助産婦にしろ、専門医学書を学習していたとなると、我々は助産婦たちの学習能力、医学知識を余りに過小評価してはならないであろう。

もっとも医師の場合からも推測できるように、一方では優秀な助産婦たちもいたが、他方ではおそらく医学知識も乏しく、いいかげんな助産婦たちも少なくなかったはずである。おそらく医師の場合と同様に、彼女たちの能力を証明するライセンスのようなものは存在しなかったであろう。しかし助産婦は、出産の現場で、場合によっては医師以上に能力を問われた場合もあったで

あろう。

こうしてみると、あきらかに実在した奴隷の女医および助産婦たちは、いかにして養成されたのであろうか。

### 第3章 教師と医師の教育

#### (1) ローマ社会における「教師と医師」

これまで1章で教師、2章で医師について、本稿で必要な範囲内でごく簡単にみてきたが、要するにローマ社会にはかなりの人数の奴隷教師たちが活躍していただけでなく、被解放自由人の教師たちのうちかなりの人々も元奴隷であったことは間違いない。そして同じことは医師の場合にも当てはまり、ローマ社会にはかなりの人数の奴隷医師たちが活躍していたし、被解放自由人の医師たちのうちかなりの人数が元奴隷であったことも間違いないだろう。それ故、奴隷教師や奴隷医師がなぜ養成されたのかという問題を考えることを通じて、ローマ社会における奴隷教育の問題を最検討してみたい<sup>(28)</sup>。

奴隷たちの従事した仕事の種類はたくさんあるが、まず最初に、なぜ教師と医師の職業が他の職業とは区別されたのかという問題をみてみたい。

教師と医師とでは従事する仕事は大きく異なるにもかかわらず、古代ローマ世界では、人間の精神に関与する教師と人間の身体に関与する医師とは、しばしば似たような職業人としてみられていた。かれらが似たような扱いを受けた理由としては、つぎのことが挙げられるであろう。(1)は、身体と精神を一体と考える、古典ギリシア以来の伝統的発想によるものであり、(2)は、ローマ社会の医師も教師も、破格の待遇を受けた一部のエリートを例外として、一般的に出自の卑しい低階層の人々が多かった点で共通していたことなどによると思われる。

教師と医師がしばしば一緒に考えられていたことは、史料にも登場している。例えば、カエサルはローマに居住するすべての開業医と教師に市民権を与えており、これは医師と教師を特別扱いするためであったし<sup>(29)</sup>、ローマが厳しい食料不足に陥った時、食料不足に対する対策としてまず奴隷たちをローマから追放した時も、教師と医師たちだけは除外したと伝えられている<sup>(30)</sup>。このことは、教師と医師の仕事は社会にとって必要不可欠の仕事であり、とりわけローマではこれらの仕事に従事していた奴隷が少なくなかったのと、こういった奴隷はローマ社会にとってそれだけ必要であったからこそ、権力者側も奴隷追放の例外として特別視したのであろう。そして、この場合も、「教師と医師」としてひとまとめに扱われている。

「教師と医師」がひとまとめに扱われていることは、国家の政策の面ばかりでない。そのことはギリシア以来の哲学的伝統から見れば理解しやすい発想であり、ローマ法上もそのような認識が一般的であると考えられる。しかし、教師と医師とが同じ職業組合に所属していたという問題は、かれらの社会的処遇の面で重要な意味をもっているであろう。もちろんここでの同職組合



に参加するような人々は、奴隷の医師や教師といったわけではなくて、それなりに社会的に認められていた人々が多かったであろうが。

## (2) 教師と医師の組合参加：ベルガモンの碑文

教師や医師の組合参加の問題を取り上げる時、最も重要な意味を持っているのが、ベルガモン出土の碑文である。1834年末にベルガモンの発掘現場から、ギリシア語とラテン語の文章が刻まれた大理石の石片が発見された。発掘者のヴィーガントは出土場所をローマ時代のギムナシウムの跡と推測し、この碑文の調査を碑文学者のルドルフ・ヘルツォークに依頼した。調査の結果、ヘルツォークは前半のギリシア語の部分は74年にウェスパシアヌス帝が発した勅令であり、後半のラテン語の部分は93-94に出されたドミティアヌス帝の布告であると断定した上で、本文を復元し公表した<sup>(31)</sup>。その結果、ローマ社会における奴隷教育に関する興味深い内容に言及していることが知られることとなった。

ギリシア語で刻まれた比較的長文のウェスパシアヌス帝の勅令は、74年12月27日付けのもので、文法家、修辞学者、医師、体育場の医師に関するものである。長い文章ではあるが、その内容は、医師と教師に与えられた重要な特典に関するもので、つぎの3つに要約できるであろう。

- (1) 医師や教師には、営舎の強制割り当てが課されることも、税金が課されることも決してないこと。
- (2) 医師や教師を不法に傷つけたり、拘禁した者は、罰金が課されること。
- (3) 医師や教師は組合をつくることが許されること。

このことからこの碑文には、つぎのような重要な内容が示されていることになる。(1)では、当時は一般人には義務であったが、行軍途中の兵士たちがその町に立ち寄った際には、兵士のために宿泊施設を提供する義務と納税の義務とが免除されている。これらの特典が当時彼らにどれくらいの利益と受けとめられたかは想像するしかないが、一般の住民には義務であっただけに、ローマ皇帝が医師と教師に具体的な特典を与えて、優遇していることは明らかであろう。(2)は、医師と教師は暴力によって脅かされたり、傷つけられたり、不法な扱いを受けたり、あるいは拘束されることから守られるべきであることを保証している。(3)では、この場合最も注目されることでもあるが、医師と教師に職業組合を形成する権利がはっきりと認められている。ローマ帝国はある意味では組合国家と呼ばれるように、同職組合の重要性を考えるならば、この組合形成の権利は決して小さくはないはずである。そして、組合に言及しているいくつかの碑文から、医師なり教師が同職組合を形成していたことは間違いない。問題は、一般的に同じ組合に所属していたと断言できるのか、その点に関してはやや慎重さを必要とするかの問題が残るだけであろう。

ところで具体的な事例を検討してみると、例えば医師たちは、他の職人たちの場合と同様に、あきらかに同職組合(collegium)を形成する権利をもっていた。イタリアのトリノ出土の碑

文<sup>(32)</sup>とベネヴェント出土の碑文<sup>(33)</sup>は、医師の職業組合 (collegia) の存在を示していることはあきらかであろう。そして、このことは当時一般的なことであったとみてもよいだろう。問題は、教師もこの同じ組合に所属していたか否かであろう。

しかしながら、現在のスイスの Aventicum 出土のある碑文<sup>(34)</sup>は、医師と教師が一緒に同じ職業組合に所属していたことを示唆していると解釈可能なものである。しかし、この碑文は文法的には他の解釈の余地もありそうだが、この碑文を写真とともに取り上げた Walser は、医師と教師が同一の扱いを受けていたものであるとためらうこともなく解釈している<sup>(35)</sup>。さらに Jackson はつぎのように語っている。

「医師と教師が同一の職業組合に所属していたことは、驚くことではない。なぜなら医療と教育は伝統的にギリシア系の人々が引き受けていた活動分野であり、かれらの関心事はしばしば重なりあっていたからである。一部の人々が受けた批判にもかかわらず、医師たちは、教師たちのように、集団としては学問のある人とみなされた。医療関係の職業の象徴の一つは、医師たちの墓石とか他の医療の描写とかにしばしば見られる巻き物であった。」<sup>(36)</sup>

このように医師と教師が同一組合に所属していたことの根拠とされるこの Aventicum の碑文は、文法的には他の解釈の可能性もあるかもしれない。しかし、医師と教師が同一組合員であったことを立証する碑文は、これ以外には少ないという事実からも、あくまで慎重さは必要ではあろうが、逆にこのことを否定する証拠にもならないだろう。それ故、Jackson のような解釈も十分説得力をもっているだろう。

先のベルガモンの碑文全体にわたって、「医師と教師」といった表現から両者が社会的に同じように扱われていることはわかる。そして、事例が少ないことからみて、すべての組合がそうであったとはいえないまでも、たとえ一部にしろ、両者が同一組合に所属していたとすれば、そのことの意味は大きいだろう。そして、この場合の職業組合の目的の中心は、政治的なものよりも、クラブでの食事とかメンバーの埋葬規定といったような社会的なものであった。それ故、両者が組合を同じくしたことの政治的影響よりも、一見仕事の内容も対象とする人々もかなり異なると思われる両者のことであるので、彼らはそのことに余り違和感がなかったものと解釈できるだろう。

### (3) 奴隷の職業教育の禁止：ドミティアヌス帝の布告

ところで、後半のラテン語で刻まれたドミティアヌス帝の布告は、アウルス・リキニウス・ムキアヌスとガウィウス・プリスクスに宛てたものであり、ローマの奴隷教育の背後事情をうかがわせる興味深い内容を含んだものとなっている。この布告をヘルツォークの校訂に従って逐語的に読めば、つぎのように書かれている。

「医師と教師の学芸は一定数の自由人の青年に伝えられるべきにもかかわらず、人間的感情か

らではなく、教授することによる収入増加が目的で、職業訓練が認められている多くの寝室系の奴隷たちに、恥知らずにも売り渡されている。余は、これらの行為をする医師と教師たちの貪欲さ（[avaritiam medicorum atque] praeceptorum）を厳しく抑制することが必要であると判断した。それ故、奴隷を教授することから収入を受け取る人物は誰であれ、ちょうどあたかもその人物が外国の都市でその職業に従事しているかのように、余の父が許可した特典（immunitas）は剥奪されるべきである。」<sup>(37)</sup>

訳文はやや逐語訳すぎるにしても、述べられている意味ははっきりしている。ただ問題なのは、肝腎の医師を指す *medicus* という語がこの石片に残っておらず、ヘルツォークによって補われたものであるという点であろう。しかしながらスエトニウスは、文法家と修辞学者とは最初の頃は明確に区別されていなかった、と述べている<sup>(38)</sup>。このことからヘルツォークは、文法家と修辞学者（*grammatici et rhetores*）とは *praeceptores* の名称で一語でくくられていた、と主張した<sup>(39)</sup>。

さらに「医師と教師たち（*medici et praeceptores*）」とは、内容面でも表現の上でもしばしば結びつけて考えられてきたとみることができる。すでに述べたことであるが、スエトニウスによれば、カエサルはローマに居住するすべての医師と自由学芸の教師とに市民権を与えており<sup>(40)</sup>、アウグストゥスが奴隷やすべての外国人をローマから追放した際にも、医師と教師を除外した（*exceptis medicis et praeceptoribus*）という表現を使っている<sup>(41)</sup>。また、類似の表現はセネカにもみられる<sup>(42)</sup>。そしてリコポーノ<sup>(43)</sup>もペロー<sup>(44)</sup>もヘルツォークの復元をそのまま支持している。

ここで言及されているドミティアヌス帝の父であり、ここで述べられている特権を許可した人物とは、前述の勅令を出した皇帝ウェスパシアヌスのことである。しかも、このラテン語で書かれたドミティアヌス帝の布告は、あきらかに前半のギリシア語のウェスパシアヌス帝の勅令を前提にしている。そして、このドミティアヌス帝の布告の内容は、当然医師と教師の養成に関するものであり、すでに与えられている特権を剥奪すべきであるとまで非難している対象とは、収入目的で奴隷たちを教育する行為とそれを行なう人々である。この布告の内容は、次のように整理できるであろう。

- (1) 医師と教師の学芸は、自由人（*ingenui*）の青年にのみ教育されるべきであること。
- (2) （それなのに）その教育の仕事が、収入目的で、奴隷の教育を引き受ける職業訓練係の手に売り渡されていること。
- (3) これらの行為を恥知らずにも請け負う医師と教師たちの貪欲さは、厳しく抑制されるべきであること。
- (4) それゆえ、収入を目的に奴隷の職業訓練を引き受ける医師や教師からは、以前にウェスパシアヌス皇帝が与えた特権（*immunitas*）を剥奪すべきであること。

そしてこの碑文は、つぎのことを前提にしていると解釈できる。医学や自由学芸の教育は、本来は自由人だけを対象とすべきものであること。もっともこの発想は、ギリシア以来の伝統的思想とは合致するものの、ローマ社会の実態とはずれている。しかし、本来それらを学習するのは自由人であったはずだから、本来の精神を述べたものであろう。つぎに、それにもかかわらず、収入に目がくらんだためとはいえ、収益目的で奴隷を教育する人々が実在したことである。そして、そういった行為は恥知らずなことであるから、止めるべきであること。つまり、このことは奴隷に職業教育をすることが可能であったことを意味している。そして、可能であったからこそ、その仕事を引き受ける人々が現実にはいたのである。さらに注目されることは、恥知らずの不心得者は、いつの時代にもどの社会にもいるものであるのに、思想家が著書で語るのではなく、わざわざ皇帝が布告を出し、碑文に刻ませたことは、それだけでもはや放任しておけない、目に余る行為と権力者の目に映ったからであろう。われわれはここで非難されている人々が、ごく少数の例外の人々であったとは信じがたい。とすれば、医師や教師の養成の問題も、ここで述べられているような事態を引き起こしたローマ社会の実態と関係づけて理解しなければならないだろう。

われわれはその家の母が出産した子供の数とその子供たちの養育に必要な乳母としては不自然な人数の乳母が雇われていた可能性<sup>(45)</sup>とか、おそらく複数の奴隷医師を貸し出して収益を挙げていたと推測される事例<sup>(46)</sup>等も考慮すると、奴隷教育の問題は乳児奴隷の養育の問題とも密接に関係していることも推測せざるをえないだろう。

#### (4) 読み書きができる奴隷

子供の奴隷に教育を受けさせ、その子の価値を高めるという行為が問題となる時、いつも引き合いに出されるのが、プリタルコスが伝える大カトーの言動である。大カトーは子供の奴隷を養育し、自分がかかえる教育のある奴隷を教師にして教えさせた上で、高値で売却することを友人にもすすめ、且つ自分でも実践していたようであった<sup>(47)</sup>。現実には大カトーはキロンという教育経験豊富な奴隷を抱えていたので、実行可能なことであったろう。このことがどの程度一般的に実践されたかは明確ではないものの、読み書きのできる奴隷が意識的に養成された可能性を示唆してはいるだろう。

この背景には、例えば読み書きもできない無教養な奴隷よりも、多少でも教育のある奴隷の方が、こなせる仕事の選択肢が多くなって便利だとか、そういう読み書きのできる奴隷を求める人があれば、それだけ奴隷市場でより高値で売却できて有利だとかの理由があったのであろう。つまり、教育のある奴隷と教育のない奴隷とでは市場価値に差があるとすれば、奴隷に教育を受けさせることは、奴隷自身のためでも、自分が使うためだけでなく、それ自体が経済的目的になっていた一面もあったのであろう。

いろんな職種に教育を受けた奴隷が活躍していたことについては、かつて Forbes がユウェナ

ーリスが列举した9つの職業 (Grammaticus, Rhetor, Geometres, Pictor, Aliptes, Augur, Schoenobates, Medicus, Magus) のうち、奴隷が従事した事例がないのは Rhetor, Geometres, Augur, Magus だけであり、9つのうち5つの職業には一般的であるにしろ稀であるにしろ奴隷が従事していたことが知られている、と主張した<sup>(48)</sup>。つまり、奴隷は教師や医師以外の職業でもたくさん活躍していたわけである。

教育を受けた奴隷たちがいたということから推測すると、一部の奴隷は特に子供の時期に、ローマ社会において何らかの教育を受たとわれわれは理解してよいであろう。しかし、その教育内容に関しては、古代ローマ人の識字率の問題とも関わり、研究者の間でも受けとめ方に微妙な違いがある。通常は奴隷たちも学校に通わせたであろうという見解<sup>(49)</sup>も、そもそもこの時代の学校の定義が問題だから、ありえない話ではない。それよりもやや説得力があるのは、前述の大カトーのキロン<sup>(50)</sup>の事例から推測して、教師たちが大家庭内部の学習室 (paedagogia) で働いていたという Mohler の見解<sup>(50)</sup>であるかもしれない。しかしながら、後者の場合、多くの家庭ではそれは実現困難だったろうとも考えられる。

ここでの教育が簡単な読み書き計算程度なのか、やや専門的な初歩的な職業教育をも含む水準のものなのかによっても事情は違ってくるであろう。当時の一般的知識水準を考える時、すぐ思いつくのはつぎの話である。

ローマ世界の人々の大多数は、キケロが『義務論』で述べている小売商売や筋肉労働のような「卑しい技芸」に従事していたと考えられるが、かれらが受けた教育は実生活に必要な実用的知識以上の水準のものではなかったであろう。ペトロニウスの作品の中で被解放自由人のヘルメロス<sup>(51)</sup>は、自分は幾何学とか文学とかその他どうでもよいものは何一つ勉強しなかったが、重さもわかるし、金の計算もできる、と自慢している<sup>(51)</sup>。

当時の人々の多くがこの程度の教育水準にとどまっていたであろうことは容易に推測できるが、他方、例えば商売上の必要から数学を学んだ人々も少なくなかった。そして、こういった人々の要求を満たしたのは実用算術の教師でもある calculator (計算人) であり、前述のヘルメロスがパーセンテージを学んだのも、calculator からであったろう<sup>(52)</sup>。

## むすびに

要するに、奴隷たちの能力を引き上げ、価値を高めるために、奴隷たちに実務能力の訓練を積み重ねることは十分推測できることである。しかし、仮に paedagogia での教育が一般的だったと想像しても、一般的にローマの教育に関しては、法的規定がそもそも不十分なことからみて、paedagogia の規模なり内容はそれこそ多様であったと思われる。つまり、奴隷もたくさんいた大規模な家と奴隷も少人数な小規模な家とでは、かなり違って当然であろう。奴隷の数が余りにも少なければ、そもそもそういう教育の場を設けることさえ困難であったろう。それ故、む

しろそこで行なわれた教育内容が問題であろう。若い奴隷たち (servuli) が受けた教育の内容が、彼らの日常生活に必要なと考えられた初歩的な読み書き計算なのか、あるいは初歩的な職業教育を含むのかによっても違うが、彼らが学んだのが ludi magister (初等学校教師) のもとであったか、あるいは calculator (計算人) とか notarius (書記) のもとであったのかという違いもある。しかし、仮に ludi magister が奴隷であったにしても、その授業はこの教師が自由人を対象とした授業とは別ではなかったかという疑問は残るであろう。そして、教師の数や生徒の数によって状況は変わっただろうと思われるが、そこでの授業は、自由学芸の教育というよりは簡単な読み書き計算の授業であったろうと想像される。その上で、おそらく必要に応じて notarius や calculator の指導も受けたのであろうと推測される。さらに、やや本格的な場合には、伝統的な教育システムの一つでもあった年季奉公の形式もあったであろう。

ドミティアヌス帝の布告に対しては、Booth は、奴隷の自由学芸教育を禁じているものの観点から解釈している<sup>(53)</sup>。もちろんこの解釈は基本的には正しいが、われわれは ludi magister や litterarius を過大評価しない方がよいように思える。そもそも奴隷や被解放自由人たちが教えている初等学校の規定などないに近いもので、ずいぶんあいまいなものだったと考えられるからである。つまり、学校は均質ではなかったので、状況によって多様だったと考えるべきであると思われる。

さらに Booth はすでに1979年の段階で、大カトーの話やスエトニウスの記述から推測して、すでに事務能力の訓練を受けた若い奴隷 (servuli) を購入することが可能であった、と大胆にも指摘し、1世紀のローマでは ludi magister も calculator も notarius も低級な専門学校を開校していた、とまで主張した。

若い奴隷に対する職業教育に関する Booth の主張は、大胆ではあっても不自然な推測ではないだろう。おそらくこの方向で模索してきた研究者も多いであろう。ただ実証がきわめて困難であるという状況が続いているにすぎないだろう。

若い奴隷たちを教育したところが学校であるのか、単なる訓練所であるのか、そして、むしろそこでの教育内容はどういうものであったのか、つまり誰が、何を教えたのかについては、Booth も論証できていないように思えるし、現在のところ決定的な史料がないようなので、議論がわかれることはむしろ当然であろう。

しかし、自分のところで奴隷に職業教育をするか、すでに訓練を積んだ奴隷を購入するかした結果、ローマ社会には職業訓練を積んだ奴隷たちが大勢活躍していたのであろう。もちろん教師や医師の場合は、より高度な教育が必要だったかもしれないが、奴隷教師と奴隷医師の養成も十分可能性はあるであろう。

若い奴隷に職業教育を受けさせることは、奴隷所有者である主人にも利益をもたらすことだったのであろう。とすれば、奴隷の職業教育を引き受ける人々がいてもおかしくないだろう。つ

まり、利益目的で奴隷教師や奴隷医師を養成する人々がいて、もはやその行為を無視できないほどであったからこそ、ドミティアヌス帝の布告が必要だったのであろう。

教育や学校に関する法的整備も不十分で、また公的援助もほとんどないにもかかわらず、ローマ社会の識字率の維持、初等教育の普及、医療体制の普及などを考えると、社会的地位も低く、経済的基盤の不安定に耐えながら生きていたこうした多くの出自の卑しい教師たちや医師たちが果たした社会的役割をもっと正しく認識する必要があると同時に、他方では、我々は奴隷教師や奴隷医師たちの養成を可能にしたローマ社会の厳しい現実を見つめなければならないであろう。

(おわり)

#### 注

- (1) 本稿の内容は、拙稿「ローマ帝政初期の奴隷教育と奴隷医師」『史観111』（1984）14-25ですすでに論じたものと一部重複するが、その後の研究を踏まえて、観点を改めて再検討しようとするものである。
- (2) Cf. Tod, M. N., "Epigraphical notes on freedmen's professions", *Epigraphica* 12 (1950) 14.
- (3) 拙稿「ローマ共和政後期における教師の報酬」『文学研究科紀要32』（1996）187-204参照。なお、すでに発表済みの拙稿で示した文献等は、本稿では大幅に省いた。
- (4) Suet. *Gramm.* 1-20. 拙稿「ローマ教育とギリシア人教師」『史観80』（1969）73-86参照。
- (5) Marrou, H. I., *Histoire de l'éducation dans l'antiquité* (Paris 1948).
- (6) Clarke, M. L., *Higher Education in Ancient World* (London 1971)
- (7) Bonner, S. F., *Education in Ancient Rome* (Berkeley 1977).
- (8) Kaster, R. A., *Guardians of Language: The Grammarian and Society in Late Antiquity* (Berkeley 1988).
- (9) Christes, J., *Sklaven und Freigelassene als Grammatiker und Philologen im antiken Rom* (Wiesbaden 9 1979).
- (10) Agusta-Boularot, S., "Les références épigraphiques aux grammatici et grammatikoi de l'empire romain", *MEFRA*, 106, 2 (1994), 653-746.
- (11) Frasca, R., *Donne e uomini nell'educazione a Roma* (Firenze 1991).  
                   , *Mestieri e professioni a Roma* (Firenze 1994),  
                   , *Educazione e formazione a Roma* (Bari 1996).
- (12) Frasca, *Educazione e formazione a Roma*, 389-546.
- (13) Suet. *Gramm.* 1-20. 拙稿「ローマ教育とギリシア人教師」参照。
- (14) Plut. *Quaest. Rom.* 59. 拙稿「ローマ共和政後期における教師の報酬」参照。
- (15) 例えば、レミウス・パラエモン：Suet. *Gramm.* 23.
- (16) Cicero, *Off.* I. 150f.
- (17) 拙稿「古典古代の奴隷医師について」『科学史研究141』（1982），49-56，および拙稿「ローマ帝政初期の奴隷教育と奴隷医師」『史観111』（1984），14-25参照。
- (18) Plin. *H. N.* 29. 17.
- (19) Duff, A. M., *Freedmen in the early Roman Empire* (Oxford 1928), 120.
- (20) Suet. *Calig.* 8. 4.
- (21) 例えば、Plut. *Caesar*, 34, 3.
- (22) Cf. Varro, *R. R.* I, 16, 4.
- (23) Suet. *Caes.* 4.

- (24) 拙稿「ローマの女医・助産婦」『文学研究科紀要41』(1996), 43-55参照。
- (25) Gourevitch, D., *Le mal d'être femme : la femme et la médecine dans la Rome antique* (Paris 1984), 223ff.  
André, J., *Etre médecin à Rome* (Paris 1987), 125.
- (26) Soranus, *Gyn.* I, 3-4.  
Jackson, R., *Doctor and Diseases in the Roman Empire* (London 1988), 96ff.
- (27) Jackson, 87ff.
- (28) 拙稿「ローマ帝政初期の奴隷教育と奴隷医師」『史観111』(1984), 14-25, および拙稿「ローマ社会の医師」『文学研究科紀要38』(1993), 171-185参照。
- (29) Suet. *Caes.* 42, 1.
- (30) Suet. *Aug.* 42, 3.
- (31) Herzog, R., *Urkunden zur Hochschulpolitik der römischen Kaiser* (Berlin 1935) 979. cf. Riccobono, S., *Fontes Iuris Romani Antejustiniani* (Firenze 1941), 13-18; Below, K. H., *Der Arzt im römischen Recht* (München 1953), 8, 23f.
- (32) CIL. V, 6970 divo | Traian. | C. Quintius | Abascantus | test. leg. | medicis Taur. | cultor. | Asclepi et | Hygiae.
- (33) CIL. IX, 1618 M, Nasellius M. f. Pal. Sabinus, | praef. coh. I Dalmatar., et Nasellius Vitalis | pater. Aug. II quinq., paganis communib. pagi Lucul. | et in perpetuum VI Id. Iun., die natale | Sabini, epulantib, hic paganis annuos × CXXV dari | iusserunt, ea condicione, ut non Iun. pagum lustrent | et sequentibus diebus ex consuetudine sua cenent, | item VI Id. Iun., die natale Sabini, epulentur; quod si | factum non erit, tum hic locus ut supra scriptum | est cum annuis × CXXV in pertuum (sic) ad collegium medicor. | et ad libertos ñ. pertineat, uti i VI Id. Iun. die natale | Sabini hic epulentur.
- (34) CIL. XIII, 5079 (7786)  
Numinib. Aug. | et Genio col. Hel. | Apollini sacr. | Q. Postum. Hyginus | et Postum. Hermes lib. | medicis et professorib. | d, s. d.
- (35) Walser, G., *Römische Inschriften in der Schweiz 1. Teil: Westschweiz* (Bern 1979), 162.
- (36) Jackson, R., 58-9.
- (37) [Avaritiam medicorum atque]praeceptorum quorum ars,  
[tradenda ingenuis adulesc]entibus quibusdam. multis  
[In disciplinam cubiculariis]servis missis inprobisslme  
[venditur non humanitatis, sed aug]endae mercedis gratia,  
[severissime coercendam] judicavi.  
[Quisquis ergo ex servorum disciplin]a mercedem [capiet]  
[ei immunitas a divo patre mco indulta], proinde ac [si]  
[in aliena civitate artem exerceat, adim]enda [est].
- (38) Suet. *Gramm.* 4.
- (39) Herzog. 979.
- (40) Suet. *Caes.* 42, 1: Omnisque medicinam Romae professos et liberalium artium doctores, quo libentius et ipsi urbem incolerent et ceteri adpeterent, civitate donavit.
- (41) Suet. *Aug.* 42. 3: Magna vero quondam sterilitate ac difficili remedio cum venalicias et lanistarum familias peregrinosque omnes exceptis medicis et praeceptoribus partimque servitorum urbe expulset,...
- (42) Seneca, *De benef.* 6, 15, 1; 6, 16, 1; 6, 17, 2.
- (43) Riccobono, 18.
- (44) Below, 8.



- (45) 拙稿「古代ローマの女医・助産婦」, 53。
- (46) Cf. Cic. *Cluent.* 176ff.
- (47) Plut., *Cat. Mai.* 20-21.
- (48) Forbes, C. A., "The Education and Training of Slaves in Antiquity", *T. A. P. A.* 86 (1955), 326ff.  
拙稿「ローマ帝政初期の奴隷教育と奴隷医師」, 25。
- (49) Forbes, 328f.
- (50) Mohler, S. L., "Slave Education in the Roman Empire", *T. A. P. A.* 71 (1940), 262-280
- (51) Petronius, *Satyricon*, 58.  
拙稿「ローマ科学と古代における "Quadrivium" の生成 (II)」『科学史研究132』(1979), 218。
- (52) M. L. Clarke, 46.
- (53) Booth, A. D., "The Schooling of Slaves in First-Century Rome", *T. A. P. A.* 109 (1979), 11-19.